

ANIMATION REVIEW

岩崎琢と世界音楽

『刀語』 ホワイトフォックス

他収録 おまけ 元永監督の映像作法
おまけ 「うたう」から「きく」への政権交代

ゴトチヒ

岩崎琢氏は「いわさきたく」と読むのだろうか？

『グレンラガン』『刀語』の音楽を担当している岩崎氏の下の名をなんと読むか、ウィキペディアで調べればすぐにわかるが、あえて調べない。私はブルボン小林のように、「なるべく取材しない主義」なのだ。古くは赤瀬川原平さんの「自宅でできるルポ」である。

しかし、音楽ジャンルとトーン（楽器）の使用範囲の広さから、経歴を調べなくてもわかることがある。

まず、『刀語』でどんな曲をやっているのか、列挙してみる。

「川井憲治には人数的なボリュームが落ちるが、それなりにムードを高める合唱」「ドメスティックなチンドン屋の曲のアレンジ」「否定姫の曲はキャバクラで流れてそうなアンニュイな感じ」「『グレンラガン』でもやっていたラップ曲」「左右田VS真庭鴛鴦戦にかかっていたモルス信号でリズムビートを刻むバトルテーマ」「毒刀鍔の映像にはやっぱりホーミー（低高音を同時に出すモンゴルの独特な歌唱法）」、そして「次回予告のテーマ」（これが一番いい）。

『刀語』だけでも、音の引き出しがこれだけある。

さらに、近所の『落語天女おゆい』が置いていない貸しDVD屋のCDレンタルコーナーから『グレンラガン』のCDを借りて聴いてみた。

「トランペット」がどうのこうのという曲タイトルは、エレキトランペットを主要楽器に使っている。NHK時代劇をケレンで彩る近藤等則の、あのエレキトランペットである(『刀語』でも使っている)。というか、近藤の代名詞とも言えるエレキペットを使うのは、スゴイ。

面白いのは、「ラップは漢の魂だ！（中略）耳の穴かっぽじってよ〜く聴きやがれ！！」（気持ちはわかるがムダにタイトルが長い）と通称「Liberate me」だ。どちらもラップの歌詞がある。この二つの曲の違いは「ジャンル違い」と思うのは、浅墓である。ウエストコースト（西海岸）とイーストコースト（東海岸）の違いである……らしい。テレビ番組で赤坂泰彦が言っていたことの受け売りなのだが、ジャズでもイーストコーストとウエストコーストに細分化されているように、ラップミュージックも同じで、西海岸と東海岸に分かれるらしい。

「ラップは漢の魂（中略）よ〜く聴きやがれ！！」は、普通にイメージするラップミュージックで西海岸系と思われ、対して「リベラ・ミー」は東海岸系と思われ、タイトルは忘れたが、「G線上のアリアが奏でられる中、亡くなった同胞ミュージシャンの追悼をラップで歌う」という曲のオマージュらしい。

「Liberate me」はアリアが歌われる中、ラップで「ラップは（中略）やがれ！！」と同じ歌詞が歌われる。「Oh! Oh! Fight Power」と。

この東海岸系の曲は、プログレッシブロックの影響と考えられる。

東海岸系はニューヨークに拠点を置くミュージシャンが多いはず。大西洋を隔ててはいるが、地理的近さがあるイギリスのプログレ系の影響を受けているはず。と、憶測ができるが、本当のところ、どうかは知らない。

あとは、ホットリーディングするしかない。

大陸の西側と東側の違いを知るには、調べればすぐわかる。

しかし、今回はコールドリーディングに徹した。

岩崎琢の音のコールドリーディングである。

やろうと思えば、映像のコールドリーディングもできる……

『けいおん!!』1クール目のOPは、ブライアン・デ・パルマのようにカメラ回転映像というカメラワークに凝ることによって観る者をキャッチするのなら、2クール目のOPはフィックスによって、カメラワークをあえて封印する。私が数える限り、カメラを意図的に動かしているのは6カットしかなく、1クール目のOPの20回に比べると、極端に少ない。では、どうやって観る者をキャッチさせるか。

今度は編集によって魅せるのである。フィックスでありながら、編集映像で飽きさせない。演技・アクションも、実に凝っている。まるでカメラの代わりに平沢唯が歌いながら回転する。ドラムのメロディに合わせて、リップシンクロするように律がドラムを叩く。これらの演技のカットとカットを繋ぎ合わせる編集によって、良質の映像を作り出している。このことは、言うなれば、フィルム・マジックだ。

メリエスの末裔のなせる業、奇術である。

シネマトグラフの誕生期に、奇術師にして興行師であるメリエスはシネマトグラフの撮影中、偶然にも編集と特撮の方法を手に入れた。言うなれば、産湯につかった嬰兒を取り上げたメリエスがその児に奇術の仕掛けを教えたのだ。その児の名を「映画」というのは、おいておくとして、メリエスはテーブルマジックなどのクローズトマジックや、シアターやスタジオなどのセット・マジックでもない、新しい奇術の分野を生み出したのだ。フィルム・マジックの誕生である。

[池田暁子さんの「週刊文春」連載のマンガ](#)によると、山田尚子さんは二十代半ばらしい。この世代は、デジタルビデオカメラが手に届く値段まで、下がってきた時期に、映像の製作に初めて触れる第一世代だ。

DVC第一世代の特徴は、あきらかに手振れにある。

映画研究会などに入って、8ミリカメラを固定する三脚でフィックスを撮ることを覚える前に、カメラを回すことを先にする世代である。何が言いたいかというと、先輩などのカメラのことに詳しい人に、まずカメラワークについての基礎を教わる前に、撮影に入る世代だ。すると、手振れ映像が当たり前の感覚になる。

映像文法では、手振れのように揺れながら被写体をとらえるのは、見る側の不安感を煽るためにある。たいしてDVC世代はライブ感などのポジティブな演出として手振れを使う。これは作っていて安心するからだ。自分が幼児期に口にした食べ物で嗜好が定まるようなものだ。

エンディングはPVを模しているのだが、これも世代的なものが窺える。現在の二十代はMTV、海外のビルボードランキングの番組が深夜に物心つく前から放送されていた時期に育った世代だからだ。今年で「ベストヒットUSA」が30周年であるから、ミュージッククリップを浴びるほど見てきた、世代ということになる。

「NO,Thank You!」の滯の両手で作る三角形に、アースウインドファイアーのジャケットからイメージを想起する。80年代には真偽不明のピラミッドパワーが流行っていて、その流れを汲むPVをレファレンスしていることが、わかる。インプリンティング的にインプットされたことがアウトプットされている。

ファミコン世代がインプリンティングされたのは、8ビットが織り成すサウンドである。音質がいいとは言えないそのサウンドを子守唄のように聞いてきた。8ビットサウンドが手離しえない、故郷なのだ。「チープでループなミニマル・ミュージック。だけど、それが僕達のエイト・メロディーズ！」 神前暁の「帰り道」のイントロ、坂本龍一の「composition0919」やスティーブ・ライヒの「ディファレント・トレイン」を聴くと、“しっぽをふってしまう”のさ。

だが、どっぷり浸かったそこから、一度は離れる。離れるのだが、我らがルーツ・ミュージックへ「行きて帰りし物語」のように帰ってくる。映像作家も同じである。自分のルーツとしての手振れ映像から一度離れて戻る。そのときの映像が『けいおん!!』の2クール目のオープニングだ。それは編集と特撮の手法の発見者であるメリエスから今まで受け継がれてきた映像手法を駆使した、フィルム・マジックなのだ。

よって、山田尚子はメリエスの末裔にして娘である。

.....何の話をしていたのか、いつもどおりに、ワケわからなくなって迷走したので、ひとまず終わる。

岩崎がタクトを振り下ろすとき、世界音楽が鳴り響くのだ。

備考 pixivにアップしたものを大幅に加筆

元永監督は、映像の基本原則をおさえながら、あえておかしなカットや構図を入れる映像作家だ。

どのような、おかしなカットや構図を入れているのか、そのために選んだ副読本として、夏目房之介さんの『手塚治虫の冒険』・・・というか、元永監督はこの本をアンチョコにしているのでは？ と思える。

夏目さんが「実際にカメラを構えても、同じような構図にはならない」ものとして、『火の鳥 未来編』と『陽だまりの樹』の構図をあげている。

実際に書籍にあたってほしいのだが、『手塚治虫の冒険』の第六講・図9の画像トリック、第七講・図25のマンガ的詐術画像である。

まず、『火の鳥 未来編』での画像トリックとは、なんらかのプロブレムが起きて手塚キャラが議論しているシーンで、“テーブルの下から仰角アングルになっている”のだが、せっかくだから夏目さんの解説を引用する。

これがもし、もっとリアルな劇画だったらまず、テーブルの下からみあげてるのに、座っている人々の顔がぜんぶみえるっていう構図自体が不可能です。かりに全員が前にのめっていると考えても、ですよ、下からみあげてるんですから、あごの下から見えるはずですよ。こんなふうに顔が正面を向いてみえるわけがない。みんながテーブルに顔向けて下を向いてないかぎり.....

夏目房之介『手塚治虫の冒険』小学館文庫

夏目さんのおっしゃるとおりで、本当はおかしい構図である。

よくマンガ評論で取り上げられる、石ノ森章太郎の『竜神沼』などの実験マンガなどに手塚が影響されていたらしい。

ところが、実写映像であっても、魚眼レンズを用いたり、野球中継の圧縮望遠で投手と打者とらえたり、日常目にする映像でも、こうしたトリックはされている。

次は、『陽だまりの樹』のマンガ的詐術画像で、これも引用に頼ろう。

図25の樽のなかの万二郎を、手塚良庵がのぞき込むシーンがありますが、これもよくみると無理な構図です。写実的な画像ならこんな角度で樽のなかから横向きの顔が出て、上から正面の顔がのぞきこむなんてことはあり得ない。仮に万二郎の肩ごしにカメラをすえたとすれば、彼の顔をみえないで、顎や耳のうしろがみえるはずで、良庵は顎の下からみあげるようにみえるはずですよ。それを、たがいの顔をはっきりとみせて、樽の縁の円形にたいして様式的に配置した。いわれないと、ふつうは気づかないと思いますけどね。（前掲書）

これらと同じ構図を、元永監督は『お兄ちゃんのことなんてぜんぜん好きじゃないんだからねっ!』でもしている。

ここで、ちゃんとした批評なら、画像引用をして、比べられるようにするのだが、資料をおさえられなかったので、しない（批評なので著作権上の制限を受けないので、資料さえあればできる!）。

しかし、いいのである。

それほど、厳密にやる批評ではなく、流してやっているのである。こんなだから、ホワイトソックスをホワイトソックスと間違えるのである。（赤で「仮」）

AEGだったかな、彼らボンクラ高校生が会議をしているとき、まあ内容は伏せておくが議論になり、図9の画像トリックのように、テーブルの下から仰角アングルになっているはずなのに、正面に顔が見えるのだ。アングル上はアゴの下から見えるはずである。

図25のマンガ的詐術画像は、女子トイレで二人がダイアログしているシーンで、便座カバーをなめて、奥の二人を引き絞りのように捉える構図と同じである。便座の中にカメラを仕込んでも、ドアの向うに立つ少女二人の後姿が見えない。女子トイレの天井が見えるはずである。そもそも、便座カバーの構造上、アニメであったように、なめることはできない。

元永監督は手塚治虫のように、こういう面白いことをする。

反対に、アニメであっても、カメラを意識すると『けいおん!!』の1クール目のOPみたいに、カメラ回転映像で、やや煽り気味に撮る。なんで、やや煽り気味に撮るかというと、床に敷設したサークル状のレーンが見えてしまうからだ。少しでも俯瞰気味にカメラを走らせて撮ると、ちらりとレーンが見える。（もしかしたら、実際に口トスコープをしたのかもしれない）

たいして、元永監督はアニメならではのカメラワークを撮る。

第八話以降のオープニングで七花と左右田が天守閣の上で相對するシーンがあるのだが、彼らの横にカメラが移動して、さらに彼らを捉えるためにパンをするから、直線的なレーンが本来見える、カメラアングルになる。さらに、最終的に天守閣から引いて、ロングショットを撮る、実写では途中でコンピュータ・グラフィックスを『スパイダーマン』シリーズのように入れないと、撮影するのが無理な映像である。車のCMなどの映像で使われる、走る車を空撮する撮影用小型ヘリコプターでも、撮るのは難しい。

私の見解は、アニメーションならば、こうした映像を作るべきである。

ただ、元永監督の場合、アニメーションとは違う文法の映像も入れる。

『刀語』第七話で、とがめと七花と左右田が正面を向く構図がある。土佐に着いたとがめと七花が出迎えた左右田と向き合っているはずが、三人とも正面を向くのは、あきらかにイマジナリティラインを越えた構図というか、二人の絵と一人の絵に画面分割しないとありえないはずなのだが、視聴者はテレビゲーム映像のコンテキスト（文脈）として処理できる。『大神』や『朧村正』といった、和風テイストのビジュアルのゲームから参照されたサイドビューの映像の上に、三人が正面を向いている。

これは、ゲームでプレイヤーがキャラクターを操作して、NPCに話しかけたときに、イベン

トが起きた、その再現である。

あきらかなに、アニメ視聴者でありゲームユーザーでもある受け手に送っている。その確信がなければ、送れない映像である。

第七話は、オールドスクールではないゲーム画像をアニメの中におとしこんだ、好き嫌いが分かれるかもしれないが、面白い回である（他にも否定屋敷の断面図とか見所がある）。

ただ、映像的なことを今まで触れていたが、キャラクターやストーリーに、手抜きがあるかという、そうではなくて、あるキャラクターの亡くなっらしい妹が「チェリオー」と言ったりする。原典・オリジナルにはない。すると、そのキャラクターにちゃんと動機が生まれている（具体的にその動機とはなんなのかは、第五話を見ればわかる）。

こうしたことに、配慮してくれると、うれしいのだ。

原作ファンじゃなくても。

それはさておき、『お兄ちゃんなんて・・・』では、下駄箱の中にくさったイカを入れられて、「嗅覚刺激を視覚刺激に物質的に変換」するなどの、面白い回があるので、ビデオソフトリリースを追って観てもらいたい。（「大リーグボール」）

これからは、夏目マンガ表現論を継承する伊藤剛が指摘した叙術トリックネタを、元永慶太郎監督はアニメに仕込むかもしれないと、予言めいたことを書いて、ピリオドを打ちたい。

2009年に起こった出来事といえば、政権交代である。

自公連立政権は倒れ、民主党が衆議院に過半数を占めたとき政権交代が起こった。

同時期に、アニメ『けいおん!』が放送開始されていたのは、偶然なのだが、博多花丸・大吉の大吉師匠の労著『年齢学序説』が「すべてこじつけ」（著者本人の言葉）であるように、あえてこじつけてみる。

岡田斗司夫さんは、エヴァ評で「カラオケで歌える曲が売れるように、パソ通で語れるアニメとして『エヴァ』はヒットした（要約）」と、語っていた。大月プロデューサーは「残酷の天使のテーゼ」はカラオケで歌えるものとして、プロデュースしたと語っている。これは岡田さんの指摘と同様に、カラオケで歌われる曲が売れるから、企画要請として出された案であり、岡田の発言を裏付ける。

カラオケ時代が訪れて、アニメソングは歌うものになっていたのだ。

実は90年代の前半は55年体制の崩壊が訪れていた。自民党が保守分裂で割れ、ついには革新系の社民党と連立を組んで、自民党は政権に復帰するのは、1994年頃である。『エヴァ』の本放送開始は、1995年10月からである。この年は知っている人は知っていると思うが、驚くほどシングルCDのミリオンセラーが多発した年である。

この頃、歌手の歌を聞くばかりだった音楽シーンに、「うたう」ことがカラオケボックスの普及で、浸透する。こじつけだから、音楽評の裏づけを取っていないが、ミスチルや小室ファミリーの曲にカラオケソングとして、かなり好まれている。「歌いやすい」というより、「歌いたい」曲かもしれない。

関川夏央さんの「25才までに聞いた曲しかカラオケで歌わない」のが正しいとしたら、95年で25才まで、そこから遡ってほしい10才ぐらいで物心がつき、耳にした曲を歌いだす年齢層、つまり団塊ジュニア世代が音楽CDの主要購買層となって、彼らがカラオケユーザーでもあった。

すると、「カラオケで歌いやすい歌が売れる」という流れが生まれる。

先ほどの補足をすると、パソコン通信の普及というインフラ整備で語りやすい素材として『エヴァ』が取り上げられてブームをまきおこした、というのが岡田さんの指摘である。ここで、一度、「きく」から「うたう」に政権が交代したのだ。

さて、ゼロ年代に入って起こった出来事は、キャラクターソングの登場にある。

キャラソンが出てきた理由は、スポンサーであるレコード会社に儲けさせるために、主題歌のシングルCDを作るだけじゃなく、アニメの中の登場人物が歌う曲という、グッズを作ることにあった。もうひとつ重要なことは、アニメはスポンサーが付きにくく、数少ないクライアントとして、レコード会社は大切なご贔負であるから、パイプを太くする意味でも、昔で言えば玩具会社主導という言葉があったように、今はレコード会社主導でアニメ製作(キャラソン挿入、EDにカバー曲)を進める。これは必ずしも悪いことじゃない。ソニーミュージックのレーベルであるアニプレックスが資金出資してくれたから『まどか』のプロジェクトがはじめられたのだから。

キャラソンの浸透は、「政権交代」の準備段階としてあったと、いえる。

キャラクターソングは聴くことに特化している。

そのキャラクターの性格を表現する歌詞内容、曲調もキャラクターに沿う。具体的な例は、『ヘタリア』の「まるかいて地球」のように、キャラクターのお国の曲調と歌詞内容にアレンジされる。

重要なことは場合によっては、歌いにくくなることである。

そして、『けいおん!』の登場で、「うたう」から「きく」に政権は交代した。

それを端的に表すのが、オープニングテーマの「歌いやすさ」にある。

『けいおん!』のオープニングは、歌いにくい曲である。それなりに、カラオケで喉を鳴らしたことがないと、歌えないのである。

「Cagayake! GIRLS」 テンポが取りやすいので普通に歌える

「GO! GO! MANIAC」 カラオケに行く人でないと歌いにくい

「Utau yo!! MIRACLE」 カラオケに通いつめている人でないと歌いづらい

この流れは、平沢唯の歌唱力の成長を図らずも演出している。

唯というキャラクターが、成長して行って、普通の人には歌いにくい歌でも歌いこなせるまでになっている。これはあくまで結果論であって、意図してやったとしたら、相当狡猾なやり口である。

さて、ヒーローソングは軍歌が起源だとよく言われる。

だとしたら、キャラソンはアイドルソングが起源と思える。

それも、80年代ごろのカラオケ文化以前のアイドル歌手の歌、ではないだろうか。その頃はサビを口ずさむことはあっても、全曲歌いきるのは、珍しかったはずだ。そして、アイドル歌手の歌唱力の高さが素直に評価された時代でもあった。

『けいおん!』の作中では山中さわ子先生しか恋愛をしない（バンドをするのも先生になるのも動機は「恋愛」）のに、放課後ティータイムの歌詞内容は軽く恋愛をテーマにしていることから、まさに80年代アイドルとの擬似恋愛的な関係を結ぶアイドルファン層が、そのままスライドして放課後ティータイムのファン層になっている。

とはいえ、こじつけだから、これ以上すると、ボロが出そうなので、ここでひとまず、終わりにしよう。

捕捉

「鋼のロック」という音楽様式なのに、歌詞は乙女心な内容のデス・デビル。などの音楽評も、からめるべきだったと思う。こじつけついでに、『刀語』のED12曲も「聴くこと」にシフトが置かれた曲である。

アニメレビュー 岩崎琢と世界音楽 『刀語』

<http://p.booklog.jp/book/24518>

著者：ゴトチヒ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24518>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24518>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

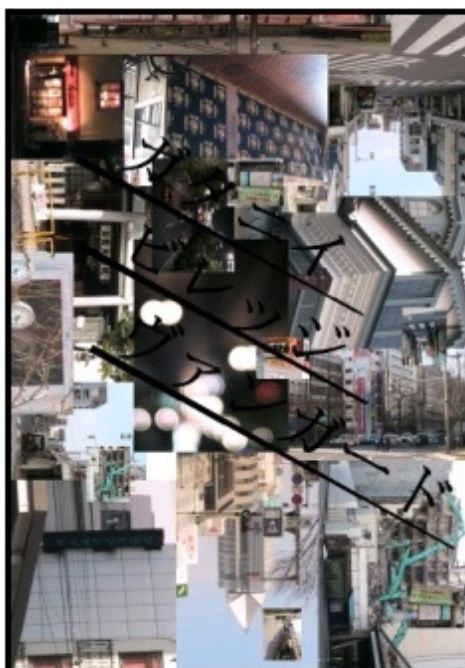
運営会社：株式会社paperboy&co.

GVV

ジャズ喫茶小説
という分野がある。
これはそのひとつ。

Architecture
Product
System

ブックログのpapier
¥50



広告
ガタニイ
ビレッジ
ヴァンガード

五島千尋



NO I TAMINA



REVIEW



楽音界の最新情報

スウェットイットホ [音誌]

志井舞の音誌 特集 最新情報
外交舞のへ 1 > 音誌 2 < 音誌 1 特集

音誌

